



2019年 第35回写真の町東川賞

受賞者発表
授賞式及びフォトフェスタ案内

写真文化首都
北海道「写真の町」東川町

第35回 写真の町東川賞受賞作家

＜海外作家賞＞ 対象国：オーストラリア

ローズマリー・ラング氏（Rosemary LAING）

受賞理由：「weather」（2006）、「Leak」（2010）、「Buddens」（2017）シリーズ
ほか一連の作品に対して

＜国内作家賞＞

しがりえこ
志賀 理江子氏（SHIGA Lieko）

受賞理由：展覧会「ブラインドデート」（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、2017 年）、
作品集『ブラインドデート』（T&M Projects、2017 年）ほか一連の作品に対して

＜新人作家賞＞

かたやままり
片山 真理氏（KATAYAMA Mari）

受賞理由：展覧会「帰途」（群馬県立近代美術館、2017 年）及び、「無垢と経験の写
真 日本の新進作家 vol.14」展（東京都写真美術館、2017-18 年）出品作ほか一連の
作品に対して

＜特別作家賞＞

おくやまあつし
奥山 淳志氏（OKUYAMA Atsushi）

受賞理由：写真集『弁造』（私家版、2018 年）及び写真展「庭とエスキース」（銀
座、大阪ニコンサロン、2018 年）に対して

＜飛弾野数右衛門賞＞

おおたじゅんいち
太田 順一氏（OTA Junichi）

受賞理由：写真集『ひがた記』（海風社、2018 年）、『無常の菅原商店街』（ブレ
ンセンター、2015 年）、『群集のまち』（ブレンセンター、2007 年）ほか、関
西地方を撮影し続けてきた作品に対して

第35回 写真の町東川賞審査会委員（敬称略／五十音順）

上野	修	（うえの おさむ）	写真評論家
北野	謙	（きたの けん）	写真家
倉石	信乃	（くらいし しの）	詩人、写真批評
柴崎	友香	（しばさき ともか）	小説家
中村	征夫	（なかむら いくお）	写真家
丹羽	晴美	（にわ はるみ）	学芸員、写真論
原	耕一	（はら こういち）	デザイナー
光田	由里	（みつだ ゆり）	美術評論家

第35回 写真の町東川賞審査講評

第35回写真の町東川賞審査会は、2019年2月14日に開催された。今年ノミネートされたのは、国内作家賞52名、新人作家賞69名、特別作家賞24名、飛弾野数右衛門賞39名、海外作家賞18名。合計187名の作家から、5つの賞を選ぶ審査となった。幸いなことに、推薦者の方々の協力によって、対象となる作家や作品も増え続けており、8人全員の審査委員が、写真集や資料などを黙々と閲覧する午前中の光景も、年々、緊張感が増している。

その緊張感を反映するかのように、国内作家賞の審査は、これまでになく難航した。議論と投票を幾度も幾度も繰り返したものの、票がきれいに割れ、結論が出ない。一時中断を挟み、他の賞の審査に移り、ふたたび国内作家賞の議論と投票を繰り返し、選ばれたのが、志賀理江子氏である。2012年の新人作家賞受賞から、いっそう強度を増している「ブラインドデート」展など一連の展開が注目された。東京都写真美術館での大規模個展開催を前にしての決定は異例ともいえるが、生と死とイメージを根源的に掘り下げ、写真という枠組みを揺さぶり、超えていく展開への期待の大きさを物語るものでもあるだろう。

毎年、混戦、激戦となっている新人作家賞は、最終段階で、岩根愛、片山真理の両氏の一騎打ちとなり、片山氏に決定した。片山氏も、初作品集の出版を前にしての、近年の発表活動が評価されての受賞となった。写真をはじめとした、さまざまな表現を自在に活用しながら、自らの身体と世界との関係を開いていく作品の在りようは、従来の写真表現の領域を再定義していくような問いかけを孕んでおり、刺激的だ。

特別作家賞は、北海道で自給自足の生活を営んでいた井上弁造氏を、およそ20年にわたって撮り続けた、奥山淳志氏を選ばれた。庭を育み、絵を描き、丹念に暮らしを紡いできた井上氏を、時間をかけて丹念に撮ることで生まれた、静謐で説得力に満ちた作品は、生きることと写真のポリフォニーを奏でる。それはまた、井上氏が生まれた開拓時代の北海道と現在とを結ぶ表現でもあるだろう。

2010年に新設された飛弾野数右衛門賞は、毎年ノミネート数が増え続けており、賞が定着してきたことがうかがわれる。今年もまた、賞の性質の議論とともに審査が進行し、さまざまな意見交換を経て、奈良県生まれで、関西地方を撮影し続けている太田順一氏に決定した。ともすれば忘れ去られていくような、

遺されたものや痕跡をとらえてきた太田氏の作品は、その土地独自の風景を、静かに浮かび上がらせている。

海外作家賞は、楠本亜紀氏の入念な調査に基づいた説明を踏まえたうえで審査に移り、対象国のオーストラリアから、ローズマリー・ラング氏を選ばれた。ラング氏は、オーストラリアの文化的、歴史的意味を内包したランドスケープをテーマに、詩的なイマジネーションをもとにした、インスタレーション、パフォーマンス、写真を融合したような作品を展開してきた。その作品は、多様な解釈を観者にゆだねる魅力に満ちている。

前述のように、難航した今回の審査だが、こうして決定してみると、国内4賞は、ここ数年の審査で名前があがっていた写真家を選ばれる結果となった。とりわけ、国内、新人作家賞は、作品発表年から3年間までを審査の対象としている東川賞ならではの決定となっている。また、審査の過程で、それぞれの賞の意味や位置づけも、あらためて深く議論された。これもまた、円卓を囲み、意見の食い違いはあっても、議論を尽くして決定していく、東川賞審査会らしい在りようだといえよう。

東川賞は、どのような賞で、どうあるべきなのか。審査会が真摯に議論を行う背景には、1985年の「写真の町宣言」からの、町の人々の多大な努力と、その趣旨に共感した世界中の人々の共感のエネルギーがあることは、いうまでもない。すばらしい環境を誇りにする東川町、そして、そこで開かれるフェスティバルの光景に導かれながら、議論を重ねる。ふりかえってみれば、今回の審査とその結果は、第35回という節目にふさわしい内容になったように思う。東川町の人々と共に、ここからさらに、新たな一步を踏み出していきたい。

写真の町東川賞審査会委員 上野 修



Photo by Anna Cuthill

第35回写真の町東川賞 <海外作家賞>

ローズマリー・ラング (Rosemary LAING)

オーストラリア・シドニー在住

1959年オーストラリア、ブリスベンに生まれる。1970年代後半より画家としての修養を積み、1980年代半ばよりミクストメディアの作品に写真を用いはじめる。

1990年代後半から「スピード」「飛行」などをテーマとした作品を制作。代表作の一つである「Flight research」(1999)シリーズでは、純白のドレスを着て青空を跳ぶ花嫁を撮影、新世紀のオプティミズムを表現した。「bulletproofglass」(2002)シリーズでは同じ花嫁が銃弾に撃たれて血を流す姿に変容し、「weather」(2006)シリーズでは紙吹雪が舞うなか空中で翻弄される姿になるなど、多様な解釈を誘う作品となっている。

森のなかに花柄のカーペットを敷いたシリーズ「groundspeed」(2001)は、美しく詩的な外観を有する一方で、アボリジニの土地を奪い、オーストラリアの大自然を覆ってきたヨーロッパ人による植民地主義を暗示している。「Leak」(2010)シリーズでは、骨組みだけの家が大地に逆さに突き刺さる場景を、オーストラリアの風景画の伝統で描かれてきたような、ロマン主義的な田舎の風景のなかに出現させている。

入念なりサーチに基づき、詩的な想像力をもとにしながら、現代のオーストラリアの文化と、その歴史との関係を問いかけるような大型作品のシリーズを、インスタレーション、パフォーマンス、写真を融合した形で制作、発表を続ける。

日本でも国立国際美術館で「国際交流展 ローズマリー・ラング エアロ・ゾーン」展(1999)を開催するほか、世界各地で展覧会多数。2012年にはアビゲイル・ソロモン＝ゴドーが執筆した作品集が出版された。

<作家の言葉>

東川賞海外作家賞と北海道訪問という格別な機会をいただき、大変光栄に思い、心から審査員の方々に感謝します。さらに、第35回写真の町東川賞を受賞された優れた作家の方々の作品とともに展示できることをとても光栄に思います。

私のプロジェクトは多くの場合、来歴のある場所で創られますが、そこに何かを組み立てたり、パフォーマーと協力したりして、撮影のための状況をセットアップします。今回は「weather」と「Leak」シリーズからの展示です。

「weather」では、パフォーマーは、強風と新聞の断片の渦巻くなかに捕らわれています。その様子はまるで、気象現象と日々の出来事を隠喩する力に翻弄されるているかのようです。

「Leak」では、ニュー・サウス・ウェールズ州クーマ・モナロ地方の羊の放牧場に、逆さにした特大の家の木枠を建てました。入植者の農地の占領を理想化した歴史と、都市化の拡大という今日の圧力の間にある緊張についてのイメージを作りたいからです。どちらにおいても、空、大地、それにつながる状況の間にある、しなやかな重力に関心を寄せています。

ローズマリー・ラング



weather #3

from the series "weather"
2006
©Rosemary Laing, Courtesy Tolarno Galleries, Melbourne.



weather #5

from the series "weather"
2006
©Rosemary Laing, Courtesy Tolarno Galleries, Melbourne.



Prowse

from the series "Leak"
2010
©Rosemary Laing, Courtesy Tolarno Galleries, Melbourne.



Eudoxia

from the series "Leak"
2010
©Rosemary Laing, Courtesy Tolarno Galleries, Melbourne.



Drapery and wattle

from the series "Buddens"
2017
©Rosemary Laing, Courtesy Tolarno Galleries, Melbourne.



Still life with teapot and daisies

from the series "Buddens"
2017
©Rosemary Laing, Courtesy Tolarno Galleries, Melbourne.



第35回写真の町東川賞 <国内作家賞>

しがりえこ
志賀理江子 (SHIGA Lieko)

宮城県在住

1980年愛知県岡崎市生まれ。2004年ロンドン芸術大学チェルシー・カレッジ・オブ・アート・アンド・デザイン卒業。2006年に仙台メディアテークで開催された「Re: search オーストラリアと日本のアート・コラボレーション」展のため、仙台で滞在制作を行う。イギリス、オーストラリア、仙台などで制作した作品を含めた写真集『Lily』『Canary』（2007年）にて、第33回木村伊兵衛写真賞受賞。2009年にはICP国際写真センター・インフィニティアワード（新人賞）を受賞する。

仙台での滞在を機に、2009年より宮城県名取市北釜にアトリエを構える。村の専属カメラマンとしてコミュニティに溶け込むなか、その土地で培われてきた個々人のオーラルヒストリーに耳を傾け、その経験を取り入れた作品を村の人々と共同制作。東日本大震災の被災体験を経て、「螺旋海岸」展（せんだいメディアテーク、2011-2012年）として発表。2012年東川賞新人作家賞受賞。

2017年に猪熊弦一郎現代美術館で開催された「ブラインド・デート」展は、2009年にタイ・バンコクで行ったアーティスト・イン・レジデンスで撮影した、バイクで疾走する恋人たちを撮影した写真に想を得たもの。盲目性、不可視性をテーマに、視覚を超えたイメージの臨界を探ろうとする。写真集『Blind Date』（T&M Projects、2017）も同時発刊。2019年には「ヒューマン・スプリング」展（東京都写真美術館）を開催し、高い評価を受けた。

<作家の言葉>

目が見えぬ、らしいのです。

それは私の知らない前世に関係するのでしょうか。

本当のことを知りたくて、大学に行き、世界中の様々な宗教について学びました。

それらは生死について実に様々なことを述べています。でも、そのすべてに違和感を感じました。

私には当てはまらない気がするのです。

タイのバンコクで出会った、生まれた頃から全盲の彼女はこう言いました。世界を目で見ないゆえに死角を持たぬ彼女は、私とは全く違う知覚によって、世間の確からしい物事の意味ですら、いとも簡単にすり抜けていくようでした。写真を撮りながら生活していると、当然のように、目に見えるイメージが次から次へと立ち現れる場面にばかり立ち会います。そして、それらをつい、信じ過ぎてしまう。彼女と私を繋ぐものは、遂には言葉しかないのだろうか。それでも身体は同じようにできている。私たちの身体にこそ、この秘密を解く鍵があるのだとしたら、生まれゆくイメージとは、歌のように響きますように、語られる言葉とは、歌詞のようにありますように。

志賀理江子



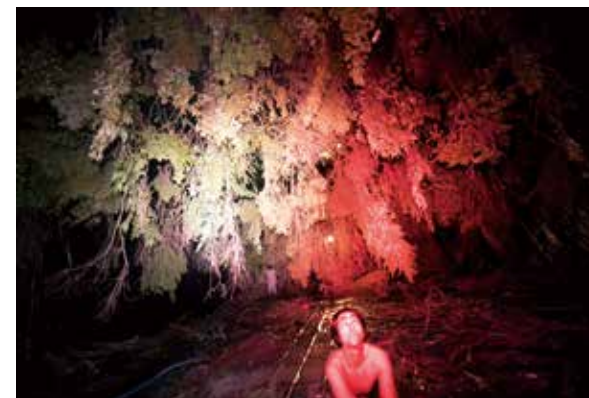
ThayvaphongとPatikan

Thayvaphong and Patikan
2008



YING & YHAI (ブラインドデート)

YING & YHAI (Blind Date)
2008



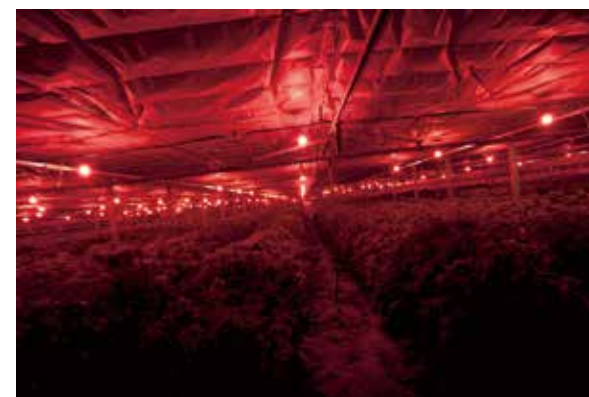
人間の春・彼には見える

I can see it in him
from the series "Human Spring"
2017



人間の春・昨日と変わらない今日

今日と変わらない明日
Today is the same as yesterday;
tomorrow will be the same as today
from the series "Human Spring"
2018



人間の春・沈黙の春

Silent Spring
from the series "Human Spring"
2016



人間の春・カタトニア

Catatonia
from the series "Human Spring"
2018



第35回写真の町東川賞 <新人作家賞>

かたやままり

片山 真理 (KATAYAMA Mari)

群馬県在住

1987年生まれ。群馬県太田市育ち。先天性疾患により、9歳のときに両足を切断する。自身で装飾を施した義足を用いた作品で、高校在学中に「群馬青年ビエンナーレ'05」奨励賞受賞。審査員でキュレーターの故・東谷隆司に出会ったことをきっかけに作家活動始める。2012年東京藝術大学大学院（美術研究科先端芸術表現専攻）修了。

手縫いのオブジェや、身体を象った立体作品、それらに囲まれた室内空間で撮られたセルフポートレイトの作品を発表。「アートアワードトーキョー丸の内2012」でグランプリ受賞。「あいちトリエンナーレ2013」（納屋橋会場）、「六本木クロッシング2016展:僕の身体、あなたの声」（森美術館）、「瀬戸内国際芸術祭2016」（直島宮浦ギャラリー六区）などの主要な国際展に出品を重ねるほか、「shadow puppet」（3331ギャラリー、2016）、「帰途」（群馬県立近代美術館、2017）、「broken heart」（white rainbow gallery、ロンドン、2019）などの個展で精力的に発表を続ける。6畳の部屋での撮影からはじまった自身と世界との関係は、アートを通じて路上、故郷、社会へと広がっていき、自他の関係性というテーマのもと、自身の身体に根差した独自の視点から作品を制作している。

作品制作のほか、2011年より義足のため憧れつつもあきらめていたハイヒールを履くための「ハイヒールプロジェクト」を開始。特注の義足用ハイヒールを装着し、歌手、モデル、講演など多岐にわたり活動している。

<作家の言葉>

今まで、自分が撮る写真を作品だとなかなか自覚できず、「セルフポートレート撮っています」とごまかしていました。娘が生まれ、針や糸、ビーズなどと疎遠になってからは手に取れる一番身近な表現手法がカメラになり、写真と向き合うようになりました。まさか、こんなに陰しく深い谷だったとは…と、「写真」に出会うたび、ゴクリと生唾を飲む日々。そんなとき、このような賞の受賞！まことにまことに恐れ多く、「写真」に対する態度を試されているような気がして（いや違う、ひねくれ者の性分でしょうか、写真の賞を受賞して、良い気になって写真を撮り、写真家を気取っているような気がして）、しばらくファインダーを覗けませんでした。しばらく経って、カメラが日常に戻ってきました。日常、生活こそ、私の制作の根源です。受賞後、一人で悶着したことにより、写真がちょっとだけ身近になりました。でも写真家にはなれなそうです。こんな感じでこれからも撮っていけたらと思います。新人賞、まことにありがとうございます！

片山真理



you're mine #001

2014



shell

2016



shadow puppet #001

2016



shadow puppet #002

2016



shadow puppet #014

2016



hole on black

2018



第35回写真の町東川賞 <特別作家賞>

おくやまあつし

奥山 淳志 (OKUYAMA Atsushi)

岩手県在住

1972年大阪府生まれ。京都外国語大学卒業。東京で出版社に勤務するなか、1998年に雑誌の取材撮影を通じて、北海道新十津川町で開拓民の最後の世代として自給自足の生活を営む井上弁造さん（大正9年生まれ）に出会う。同年に岩手県の雫石町に移住し、写真家として活動を開始。東北の風土や文化をテーマとした作品を雑誌等で発表。

1999年より四季の移り変わりにあわせるようにして訪問を重ね、エスキースを描きつづける弁造さんのなかに、「生きること」を探るようにして撮影を続ける。2006年「フォトドキュメンタリーNIPPON」（ガーディアン・ガーデン）選出。弁造さんの10年を追った「明日を作る人」（新宿ニコンサロン、2008年）、岩手の茅葺民家で自給自足を送る人物をとらえた「彼の生活 Country Songsより」（銀座、大阪ニコンサロン、2012年）、東北の祭礼行事の今をとらえた「あたらしい糸に」（銀座ニコンサロン、2015年、第40回伊奈信男賞受賞）などの展覧会を開催。

2012年4月に弁造さんが逝去（享年92歳）した後も、弁造さんが慈しみ育てた庭と遺品のエスキースの撮影を続ける。2018年、これまでに撮りためた写真を編んだ私家版写真集『弁造 Benzo』、展覧会「庭とエスキース」（銀座、大阪ニコンサロン）で日本写真協会賞新人賞受賞。2019年4月、写文集『庭とエスキース』（みすず書房）出版。

<作家の言葉>

このたびは、名誉ある賞をいただくことになり、大変光栄に思っています。

もう20年も前のこと、「写真を通じて他者に近づきたい」と考えていた25歳の僕の前に胸を張って立ってくれたのが北海道の新十津川で暮らす井上弁造さんでした。

当時、弁造さんは自分の手で建てた小さな丸太小屋に暮らし、畑と森からなる庭を育てながら自給自足の暮らしを営んでいました。僕はそんな弁造さんの暮らしと知恵とユーモアに溢れた精神に魅かれ、岩手から通い詰めるようになりました。

弁造さんは2012年に逝ってしまいましたが、生前、そして死後と20年間以上に渡って撮ってきた弁造さんとの時間が今回の受賞を通じて、北海道の地で多くの方々にご覧いただけることに深い感慨を覚えます。

弁造さんは恥ずかしがりつつも「わしゃあ、やっぱり北海道が落ち着くな」と笑いながら、どこかで展示を見てくれているようにも感じます。

僕の日々を作ってくれている方々、そして弁造さんに深く感謝いたします。

奥山淳志



エスキースを描く

Drawing Esquisse
2010



秋の庭、メープルともに

Autumn Yard with Maple Trees
2001



自給自足の庭にマーガレットが咲く

Blooming Marguerites in the Self-sufficient Garden
2007



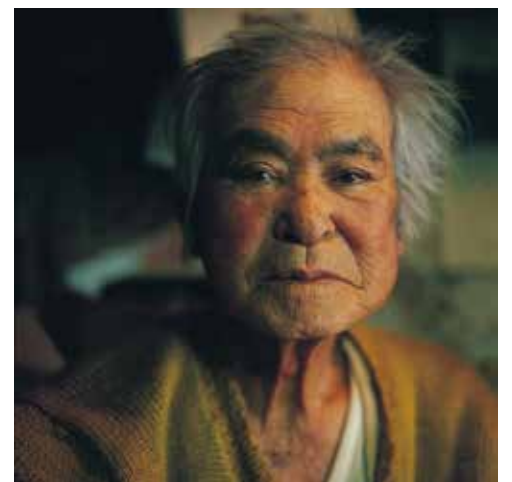
ようやく完成した母と娘の肖像

Finally Finished Portrait of a Mother and Daughter
2009



薪を運ぶ 11 月の朝

November Morning, Carrying Firewood
2011



最後のポートレート

Last Portrait
2012

※詳細なキャプションについて東川賞HPをご参照ください。For further information about the captions, please refer to our website.



第35回写真の町東川賞 <飛弾野数右衛門賞>

おおたじゅんいち

太田 順一 (OTA Junichi)

奈良県在住

1950年奈良県生まれ。早稲田大学政治経済学部中退。大阪写真専門学校（現・ビジュアルアーツ専門学校・大阪）卒業。新聞社でカメラマンとして勤めた後、フリーランスとなる。

1983年より猪飼野（大阪市生野区）に暮らす在日朝鮮人たちや、大阪の大正区に多く暮らす沖縄の人たちを撮影。1998年からは、全国にあるハンセン病療養所を回って、入園者や、風景、部屋の細部の撮影を行う。同時期に、大阪湾岸の工業地帯でひっそりと咲く花の撮影をはじめ、初のカラー写真集『化外の花』（ブレーンセンター）を出版、日本写真協会賞第一回作家賞受賞。この頃から、「人」よりも、人や自然の営為の痕跡をとどめる「もの」をとらえた写真の発表をはじめめる。

2007年、大阪24区を順に歩き、人影のない街角の風景を撮った写真集『群集のまち』（ブレーンセンター）を出版。亡き父が認知症になる前から20年間毎日書き続け、老い、変容する様が文字や文章からまざまざと読み取れる日記を複写した写真だけからなる展覧会「父の日記」（銀座、大阪ニコンサロン、2009年）で、第34回伊奈信男賞受賞。

阪神大震災で大被害を受けた菅原商店街（神戸市長田区）の焼け跡を、震災直後におがむように撮り進めた写真と、栄枯盛衰をあわせもつ大和の風景を地続きに並べた『無常の菅原商店街』（ブレーンセンター、2015年）や、大阪湾の環境再生実験のため、岸和田の沖合いにつくられた人工の干潟に消えては現れる世界の痕跡をとらえた『ひがた記』（海風社、2018年）など、近年では連綿とつながる命の「永遠」の相を、写真に撮り収めるような活動を行っている。

<作家の言葉>

奈良に住みつつ大阪を仕事のベースキャンプとして、写真のいとなみを40年余り続けてきました。撮影する場所の多くは自分の生活圏である関西です。

わざわざ遠くへ出かけなくても、撮るべきものは地元にもいっぱいあるからですが、一方でまた、生活者としての身体感覚を大切に身近なところをこそちゃんと見ていきたい、との思いをもっているからです。

さらにいうなら、人がふだんの暮らしのなかで身近なだけに見てはいるけれど見ていないもの、それを写しとめたいとも願ってきました。実現できているかどうかはともかく、そういった姿勢が今回、評価していただけたのかなと、手前勝手な推測をしています。

受賞を知らせる電話は、道を急いでいた京都・三条大橋のたもとで受け取りました。鴨川に吹く風が妙にくすぐったかったです。私を選んでくださった方々、そして賞の運営に携わっておられるすべての方々に心からお礼を申しあげます。ありがとうございました。

太田順一



日本のなかの朝鮮 大阪

『女たちの猪飼野』より

Korea within Japan, Osaka
from "Women in Ikaino"
1983



本土のなかの沖縄 大阪

『大阪ウチナンチュ』より

Okinawa on the Mainland, Osaka
from "Osaka Uchinanchu"
1992



荒地に咲く花 大阪

『化外の花』より

Flowers in the Wasteland, Osaka
from "Flowers in a Land Left Behind"
1999



大阪24区を歩く 大阪

『群集のまち』より

Walking the 24 wards, Osaka
from "Cities of Crowds"
2004



遠い日の痕跡 奈良

『遺された家—家族の記憶』より

Traces of Days Past, Nara
from "The House Left Behind - Memories of a Family"
2011



現れては消える世界 大阪

『ひがた記』より

The World which Comes and Goes, Osaka
from "Record of a Tidal Flat"
2006

第35回 東川町国際写真フェスティバル

～写真の町東川賞関連事業・自由フォーラム2019～

<受賞作家作品展>

会期：8月3日（土）～8月28日（水） 会期中無休

時間：10：00～17：00（8月3日は15：00～21：00、8月28日は15：00まで）

会場：東川町文化ギャラリー

料金：町内100円、町外200円（8月3日、4日は無料開放）

海外作家賞……………ローズマリー・ラング

国内作家賞……………志賀理江子

新人作家賞……………片山真理

特別作家賞……………奥山淳志

飛弾野数右衛門賞……太田順一

●8月3日（土）

13：30～14：30 授賞式（東川町農村環境改善センター）

15：00 テープカット（東川町文化ギャラリー）

15：30～17：00 レセプション「受賞を祝う集い」
（東川町農村環境改善センター）

●8月4日（日）

13：00～17：30 受賞作家フォーラム（東川町文化ギャラリー）

パネラー：東川賞受賞者、東川賞審査委員、ゲスト

■■■■ 写真の町とは ■■■■

1984年、東川町に開墾の鉄がおろされてから満90年のとき。10年後に迎える100年に向け、後世に引き継いでいく町の未来をどのように思い描くかを考えました。東川は大雪山国立公園の大自然に恵まれた町であり、多くの写真の被写体となってきました。この美しい環境を後世のために守り育てながら、人々がいきいきと暮らす町であり、住民でありたい。そして、この若い町よりも、わずか半世紀ほど早く生まれた若い文化である写真。若い町が若い文化に取り組むことで、どこにもない独自の文化や新しい伝統を育てることができる。そうすることでこの町が日本や世界での役割を担い、心豊かな暮らしを育んでいくことにつながると考えました。

1985年6月1日、東川町は豊かな文化田園都市づくりをめざして、とてもユニークな「写真の町宣言」を行いました。写真文化によって町づくりや生活づくり、そして人づくりをしようという、世界でも類例のない試みです。出合いを永遠に記録する写真による、町の美を永遠にとどめるための活動は、今もさらに展開し続けています。

この「写真の町宣言」にうたわれた、写真によって出合いにみちた町にしようという理念を実現し、「写真の町」の一年間の集大成と翌年への新しい出発のための祭典として、1985年から毎年夏に「東川町国際写真フェスティバル（愛称：東川町フォトフェスタ）」が開催されています。

東川町フォトフェスタは、全体の会期を約1カ月とし、7月末から8月頭に設定されたメイン会期には、写真の町東川賞授賞式を中心に、受賞作家作品展やフォーラム、写真家たちと出会う各種パーティ、新人写真家の登龍門ともいえる写真インディペンデンス展、写真愛好家・大学生によるストリートギャラリー、写真と音楽のコラボレーションなど、写真が異分野の文化と出会うイベントも多数行われます。

また、メイン会期の前後には、各種写真展や写真ワークショップ、写真教室、町民写真展、小学生から中学生を対象とした写真少年団活動など、会期全体を通じて、芸術としての写真から大衆的な写真とのかかわりまで、訪れる人々や町民に幅広いプログラムで写真文化の魅力を伝えていきます。

さらに、1994年からはじめられた、全国の高校の写真部やサークルを対象にして行われる写真大会「写真甲子園」では、地元サポーターの応援のもと、全国から集った高校生たちが北海道を舞台に写真を撮影し、熱戦を繰り広げます。

2014年3月6日、30年に亘る「写真文化の積み重ね」、そして地域の力を踏まえ、私たちは未来に向かって均衡ある適疎な町づくりを目指し、「写真文化首都宣言」行いました。「写す、残す、伝える」心を大切に写真文化の中心として、写真文化と世界の人々を繋ぐ役割を担うことを決意するものです。

■■■■ 写真の町東川賞規定 ■■■■

●趣旨

写真文化への貢献と育成、東川町民の文化意識の醸成と高揚を目的とし、これからの時代をつくる優れた写真作品（作家）に対し、昭和60年（1985年）を初年度とし、毎年、東川町より、賞、並びに賞金を贈呈するものです。

●賞

写真の町東川賞＜海外作家賞＞	1名	賞金 1 0 0 万円
写真の町東川賞＜国内作家賞＞	1名	賞金 1 0 0 万円
写真の町東川賞＜新人作家賞＞	1名	賞金 5 0 万円
写真の町東川賞＜特別作家賞＞	1名	賞金 5 0 万円
写真の町東川賞＜飛弾野数右衛門賞＞	1名	賞金 5 0 万円

●対象

海外作家賞は、世界をいくつかの地域に分割し、年毎に、その対象地域を移動させ、やがて世界を一巡するものとし、発表年度を問わず、その地域に国籍を有しまたは出生、在住する作家を対象とします。

国内作家賞及び新人作家賞は、発表年度を過去3年間までさかのぼり、写真史上、あるいは写真表現上、未来に意味を残すことのできる作品を発表した作家を対象とします。

特別作家賞は、北海道在住または出身の作家、もしくは、北海道をテーマ・被写体とした作品を撮った作家、飛弾野数右衛門賞は長年にわたり地域の人・自然・文化などを撮り続け、地域に対する貢献が認められる者を対象とします。

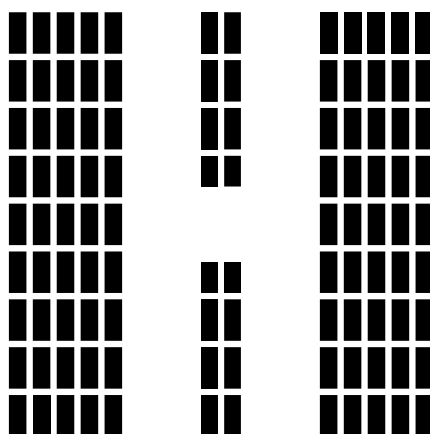
●審査・表彰

東川町長が依頼するノミネーターにより推薦された作家を、東川町長が委嘱した委員で構成する「写真の町東川賞審査会」において審査します。また、授賞式は毎年、東川町国際写真フェスティバル開催期間内に東川町内で行い、あわせて受賞作品展、記念フォーラム等を開催します。

●その他

受賞者には対象作品の中から任意に、東川町民にオリジナル・プリントを寄贈していただき、東川町民は、その作品を永久的に、大切に保管し、写真の町・東川町を訪れる人々に公開する責任をもち、「写真の町・東川町文化ギャラリー」に展示し、友好や文化に貢献できるよう努めます。

賞の対象数は、これを固定するものではありません。より多くの優れた作家に贈呈することを、目的の発展と考えます。他者からの賞の増設・新設申し出等に関しては、積極的に合議します。



〈お問い合わせ先〉

東川町写真の町実行委員会

〒071-1423 北海道上川郡東川町東町1丁目19番8号 東川町文化ギャラリー内
写真の町課（担当：矢ノ目・阪部・吉里）

TEL.0166-82-2111/FAX.0166-82-4704

E-mail: photo@town.higashikawa.lg.jp

<http://www.photo-town.jp/>

※受賞作家の顔写真及び作品画像をデータにてご用意しております。

※作品画像は受賞作家展出品作に限りません。